教区だより

2016
7・8月
第333号
真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

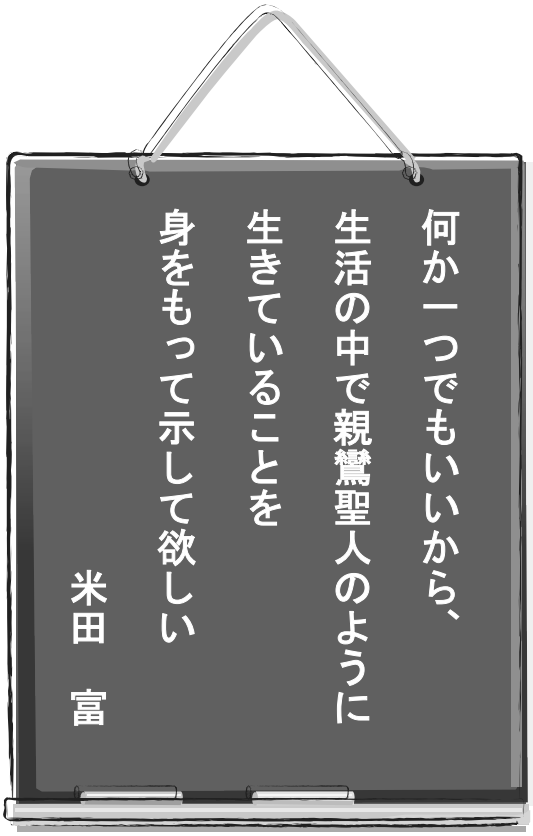
3 特集 「教区同和協議会の声」
岡崎真澄氏より、課題と今後の歩みについて寄稿いただきました。

4 雑宝（ざっぽう）
～私を歩ませた言葉～
【筆者】近江第６組　本誓寺　住職
野田（のだ）　彬雄（あきお）　氏

5 連載 大乗仏教ー釈尊観の深化（しんか）ー
《第4回》 仏弟子たちの探求（２）
織田（おだ）　顕祐（あきひろ）　氏

6 今という時代／出会いの窓

7 京都教区教化レポート（育成員等研修小委員会）



■■■京都教区の動き■■■

育成員研修会

五月十二日（木）、講師に愛知大学国際問題研究所客員研究員で宗教学者の内藤理恵子氏を迎えて開催。講題は「葬送文化の現在」で、三十二名が参加。

首都圏の全葬儀の一割が「無宗教葬儀」という現状について、エンディングノートの影響や、デジタルネイティブ（物心ついたときから検索している）といわれる今の若者の気質を交えてお話しいただいた。

直葬や無宗教葬儀の増加にみられるように、激変している葬送（葬儀）の現状に、改めて「寺院の今日的役割」について考えさせられた。

（育成員等研修小委員会主査　藤浪　遊）

住職総合研修会

五月十六日（月）、正誓寺（丹波第二組／亀岡市）において、組織拡充小委員会主催の「二〇一五年度住職総合研修会」が帰敬式を課題にして開催された。

まず、磯野恵昭氏（教務所長）より「真宗同朋会運動の趣旨」について講義。磯野氏は住職として御門徒と関わる視点から同朋会運動について話された。その後、三木彰円（あきまる）氏（大谷大学教授）より「帰敬式の意義」について講義。三木氏は、帰敬式を受式し釋を名告る意味を、世間の立場を超えて仏の教えを拠り所として生きる者になることを名告ることであると話された。そして、松村大栄氏（本廟部堂衆）より「帰敬式執行の講習」を受けた。

地区巡回で開催してきた帰敬式を課題としての住職総合研修会は丹但地区が最後となる。

（組織拡充小委員会主査　谷　大輔）

「男女両性で形作る教団」を目指して公開研修会

五月十八日（水）、教区会館において、組織拡充小委員会主催で「男女両性で形づくる教団」を目指し、「セクシャルハラスメントにいたる男性の心理」を演題に公開研修会が開催された。講師には、セクシャルハラスメントから性犯罪の分野まで、広く活躍されている立命館大学教授の中村正（ただし）先生をお迎えした。

本研修会では、ＮＨＫの番組として収録されたものを使って、学校、社内、男女間、親子、夫婦、介護など様々な場面での男性がハラスメントに至る心理をうかがい知ることができ、暴力である認識へと気づかせてくれる時間でした。

本当に身近で、気づかない具体的な問題を提示され、意義深い研修会であった。参加者が少なく残念でもあった。

（男女共同参画実行委員会委員　齊藤　栄子）

聖典学習会

五月二十日（金）、午後一時三十分より教区会館にて、安冨信哉教学研究所所長に『歎異抄』第六条を講義いただいた。以下三点に集約する。

一、自我によって公なるものの私有化が起こる。公なるものは眷属無量（けんぞくむりょう）の世界である（『論註』）。ここに同朋思想の根源がある。

二、法によってあきらかにされた自我を自己と呼ぶ（転識得智（てんじきとくち））。ここに同朋社会の顕現を見る。

三、同朋社会の顕現を謳（うた）いながら月光（がっこう）大臣の「梅陀羅（ばいだら）」発言をどういただくか（『観経』）。現然する差別社会への対決姿勢を親鸞聖人に学ぶ以外ない。

（育成員等研修小委員会委員　村上　宗博）

特集　教区同和協議会の声

教区同和協議会運営委員
岡崎　真澄

真宗大谷派が、初めて糾弾を受けてから約五十年が経とうとしています。この間、私の中で何が変わったのか、また何も変わらなかったのかと思いますと、何も変わったところが無いように思います。何故かと考えますに、糾弾は教団が受けたにも拘らず、教団の一部の人達の問題だと思ってしまっていたのです。本来教団が糾弾を受けたということは、私を含め教団全体が受けたと考えるべきだと思います。大抵の人間は、他人が差別することには批判をしますが、自ら差別をする時は、差別と考えずにしてしまいます。なぜなら、その言葉が自分の中では普通の思いであって、差別をしているという自覚が無いが故に、指摘されても素直に受け入れられないのです。

こういうことを糾弾の中で、米田富さんの発言が『部落問題学習資料集』の中に「米田富の怒り」として掲載されています。その冒頭は

先程から何やら差別したことが悪い、申しわけないとかこう、我々に謝るように言うておられますけどね、私は皆さん方、本願寺の僧侶としてね、そういうことはご開山に申しわけがなかったというような気持ちはないんですか。

と始められ、また終わりには

今ここへ糾弾に来ているのはね、勿体ないことですけどね、私は親鸞を有難いと信じきっていますから、なおあんた方に対してはこっぴどく言いたいんだ、私は。それでも親鸞の弟子か。

と締めくくられていきます。

これらの発言は部落差別を受けている人々の怒りというより、表面上のことしか言えない教団に対しての悲しみであり、自覚を促す発言であると思います。そして、今も問われているというよりは、糾弾を受け続けているということです。何故なら、未だ差別解消には至っていないからであります。

京都教区も長年学習会を行ってきましたが、共通する学習資料が無かったので、

（一）部落差別の歴史―部落差別とは何か―
（二）教団と部落差別の歴史
（三）親鸞聖人の教えと教団の歩み
（四）現在の我々の課題としての部落差別（今後の我々の方向）

以上の四項目を基本として、各方面より講師の先生を招いて講義を受けて、運営委員会の編集委員の御苦労があって資料編集が進んでいます。

（一）・（二）・（三）の項目は、先生が持っておられる資料や既成の資料によって学習をしてまいりましたが、（四）の項目は、今学校や社会では心無い言動によって心の病を患って、引きこもりになったり、悲しいことに自ら死を選ぶという報道がなされております。刃物は、目に見えて人を傷つけたり死に至らしめる危険が認識できます。しかし、差別やいじめ等のように言葉などによる暴力は、目に見えない刃物であるという自覚を持って、部落差別やいじめ等に苦しんでいる人の解放と、差別やいじめ等をしている人のそれらをするという柵から解き放たれる事を願います。

雑宝

近江第六組　本誓寺　住職
野田　彬雄

「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである」

今までの人生を振り返って、あの時こうしておけば良かった、こっちの道に進んでいたらどうなっていただろうと思う時がある。しかし、それとは別に、これまでの経験を確かめてみると、気付かなかった自分の魅力を知ることができることもある。

就職活動をした方ならご存知かもしれないが、私は「人生の棚卸（たなおろし）」というものをしたことがある。それは、自分のこれまでの経験や、得てきた成果や能力、知識などを書き出すことである。本来、棚卸とは、会社やお店などが今ある商品の数量や価格を調べ、在庫を把握し利益を確認することであり、この本来の棚卸という意味とは多少異なるかもしれないが、人生の棚卸とは言わば、自分の経験、成果や能力、知識などを把握し、それらによって自分がどのような力を発揮できるのかを確認することだと思う。そして、それを就職希望先の業種や職種などに関連するものに精査しＡ４用紙数枚にまとめ、履歴書とは別に自己ＰＲとして提出するのである。私はこの作業によって、それまでの経験を確かめることができた。それは、忘れていた経験を思い出すきっかけにもなり、些細（ささい）なことだと思っていた経験や成果が魅力のひとつであるということを知ることもできた。こういったことによって、それまでの経験に自信を持つことができ、そのことが自分への自信にもつながった。人生において自分に自信を持つことは大事なことだと思う。

私には二歳の息子がいる。言葉を少し話せるようになった息子と夕食の時などにその日あった出来事を話す。「今日はこんなことがあったね」「こんなことができるようになったね」など、その日のことを思い出し、息子が経験したことやできるようになったことなどを確かめ合っている。この会話もその日の棚卸であって、本人にとって自信につながっているのかもしれないと、この原稿を書きながらふと思った。

この「雑宝」のテーマである、自分にとって大切な「言葉」。この執筆にあたり、二度目の人生の棚卸をした。これまでの人生の中、自分にとって大切な言葉や影響を与えられた言葉はいくつかあるが、こうして三十三年を振り返り、人生の棚卸をすると、これまでのあらゆる経験によって、今の自分が形成されていたことや、それらの経験が自分の自信にもつながっていること、経験があって自分があるということを改めて感じた。

「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである」

自分という個人がある上で、様々な経験をしてきたわけではない。だから、あの時こうしておけば良かった、こっちの道に進んでいたらどうなっていただろうといった考えは成り立たないのだろう。この言葉のように、これからも色々な経験をして、また新たな自分という個人が形成されていくのだと思う。そして、いつの日かまた、人生を振り返った時は、息子と一緒に人生の棚卸をして、お互いの経験を確かめ合いたいと思う。

大乗仏教
―釈尊観の深化―

第４回
仏弟子たちの探究（２）

織田　顕祐
（大谷大学教授）

前回は、ブッダ釈尊の入滅によって「ブッダとは何か」と問われた仏弟子たちが、「歴史的な出来事を通して普遍化されたブッダ釈尊」という釈尊観に到達したことを述べました。この普遍化されたブッダとか、前回述べた「ブッダ釈尊の超越性」いうことをもう少しわかりやすく言い直せば、「功徳によって成り立っている」ということに他なりません。釈尊は、すべての物事はそれ自体で成り立つのではなく（＝無我）、条件によって成り立っている（＝縁起）という真理を明らかにされたのでした。それ故、「法をともしびとせよ」と教えられた仏弟子たちが、次にブッダ釈尊の功徳を成り立たせている条件とは何か、と探求していくのは当然のことでしょう。この点に触れる前に、もう少し整理しておきたいことがあります。それは、仏弟子たちのもう一つの問いであった「法とは何か」という問題です。

実在主義の仏弟子たちは、ブッダ釈尊によって説かれた教法と戒律（言葉としてのこされたもの）が、依りどころとすべき「法」であると考えたことは前回触れました。一方で、釈尊が、「私は古の聖者たちが歩まれたその道を歩んだに過ぎない」と教えていたことも既に触れました。この教えによれば、ブッダ釈尊が生まれる前から既にあって、釈尊もその道を歩み、すべての人々もその道を歩んでブッダになっていくような不変の道の存在が思われます。讃仏主義の仏弟子たちは、このような不変の道こそブッダが教えたかったものに違いないと確信したのです。この不変の道を、ブッダ釈尊が歩まれた道という意味で「仏道」と呼びました。また、それをほめ讃える意味で「讃仏乗（ブッダが乗っていかれた乗り物を讃えるという意味）」とも呼びました。さらに縁起の道理も釈尊によって発見されたことなので既にあった不変の道理と言えるでしょう。こうして、ブッダ釈尊をブッダたらしめたその原因が探求されるようになりました。

この実在主義の仏弟子と讃仏主義の仏弟子の立場の違いを、わかりやすくたとえた教えがあります。『正信偈』に七高僧の一人として登場するインドの龍樹が説く「指月のたとえ」です。それは、〈智者が無知の人に「月を見なさい」と指差して月を教えようとしました。ところが無知の人は指ばかりを見て月を見ようとはしません。それで智者は、「私は指差して月を教えようとしているのに、一体どうしてあなたは月を見ないのか？」と叱った〉というたとえです。このたとえによれば、無知の人は智者に叱られ、教えられることによって初めて月を見ることができるのですが、教えられなければ終に月を見ることはできません。「月を見なさい」という言葉は、状況の中でこそ意味を持つのです。ブッダ釈尊の言葉を大切にするという態度が間違っているというわけではありませんが、それだけでは不十分なのです。この点に気づいた讃仏主義の仏弟子は、「ブッダ釈尊をブッダたらしめたその原因は何か」という視点と合わせて、「法とは何か」を探求していったのです。

今という時代

数年前になるが、お稽古に通っていた先生のところを辞した。旧知ではなく、門徒さんの紹介というご縁だったが、三年程で、エイッ、辞めよう、と思った。

初めて伺い玄関の扉を開けた時、某政党のポスターが目に入り、あっ、まずかったかなと、訳もなく思った。でも、先生が多々おられるお稽古事でもないし、考え方が違うことは珍しくもない、と自分なりの理由をみつけてお世話になることにした。浄水器から始まり、空気清浄器、美顔器、健康食品・・・そして新聞。数えきれない程のものを勧められたのだが、私は全てお断りした。断りきれず嘆いている方々もあった。「これを唱えたら病気が治る、体調がすぐれないのはこれを唱えないからよ」と言われている方もあった。

これはなにか違うな、と思うのに時間はかからなかったのだが、習っているのは芸事だけで、それ以外は見習わなければいいのだと、また理由をさがしては続けていた。

そんな時から、ずっと心の片隅にあったのは、宗教ってなんだろうということだった。教えを宗とする、大切にする、などと聞いた記憶はあるが、教えというものがわからない上に、大切にするということ、そのことすらわからない。時間をかけることなのか、お金をかけることなのか・・・。普通のマンションの一室に住む人が、宗教というか宗教団体というか、その勧誘に懸命である一方、あまりに当たり前のようで忘れつつあるのだが、見るからに宗教施設に身を置きいろいろな恩恵を受けつつも、なんとなく懸命にならない、なれない自分はなんなのだろうと。

そもそも、先生が勧めておられた物のうち、新聞以外は宗教と直接関係がないのかもしれない。でも、私がその先生を考える時、宗教が切り離せないものとして映る。ということは、他者が私を見る時に、そこに宗教をみるのだろうか、そうみえるほど自分の中で大きな存在なのだろうか。そんなことを考えていると、どこに対してか誰に対してかわからないが、ごめんなさいという気持ちでいっぱいになる。

真宗門徒だとかどこかの信者であるとか言葉であらわせるものよりも、あやふやだけど、生き方とか人柄とか、にじみでてくるものに結局左右されている自分なのだろうと、なんとなく心の波風がおさまりつつあった時、ある法座でお聞きしたことがスッと入ってきた。「法話というのは、話の内容も大事かもしれないけど、それよりも冷や汗をかきながらでも何かを伝えようとしているその姿を門徒さんは見ておられるのではないか」と。たぶんそうなのだろうと思ったのも束の間、いまの自分に都合のよい言葉をもらったと思っているだけではないかと、また浮かび、迷走というほどでもなく、迷歩をしているのだろうと思う。

（編集委員　東　美恵子）

出会いの窓

～書類のかんたん整理法～

「デジタル社会」と呼ばれるようになっても、まだまだ紙媒体が主流の世の中。次々と書類がたまり、気づけば机の上が書類の山脈に・・何とかしたいけれどなかなか片付かないという方に。

方法はA4サイズの封筒に一つの内容の資料を入れ、封筒の右上に項目を書いて順に並べるだけ。項目を探すときは並んだ封筒の右上をパラパラとめくります。新しい封筒や抜き取った封筒は左端に入れ、常に左から更新順にします。何も考えずにポンと封筒に入れてポンと並べるだけ！たまたまどこかで知った単純すぎるこの方法、ずぼらな私にはジャストフィットです。もとは『超整理法』野口悠紀夫著にあるそうです。

（編集委員・岡本大志）

京都教区教化レポート

【育成員等研修小委員会】

今年度より、三つの「教区御遠忌記念事業」が宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年お待ち受け事業として始まりました。主に住職・寺族を対象とした研修の場に関わっている育成員等研修小委員会は、その内のひとつ教学・声明作法研修会「拾学舎（しゅうがくしゃ）」を主催しています。

拾学舎は、教区で開催されるほとんどの研修会が平日に開催されている現状をふまえ、これまで参加が難しかった方々のご参加をも願い、土曜日に開催しています。

内容は「教行信証」講読（講師・藤嶽明信大谷大学教授）と声明作法の学び（講師・泉康夫本山堂衆、野間顕本山堂衆）になります。現在、第一期（二年で六回開催し一期と数える）の前半三回が終了し、来年度は第一期の後半三回と、第二期の受講者の募集を予定しています。新規事業の拾学舎ですが、第一期十二名の受講者の意欲的かつ真剣な姿勢を目の当たりにして、この場が待たれていたのだと感じています。

広範囲な京都教区にあって、次代を担う育成員の誕生を願い継続して開催されている「伝道研修会」と合わせ、互いを語る中で関係性が広がっていく「出会い」の場が持たれていることは、大きな意味があることを思います。

各研修会への積極的なご参加並びに、ご意見・ご要望をお待ちしてます。

（育成員等研修小委員会主査　藤浪　遊）

事務連絡

《住職任命》

二〇一六年五月二十八日付

近江第六組　福泉寺　藤井　良明

〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第八組　玄照寺前住職　髙野　昭吉　七十三歳

二〇一六年四月七日

近江第二十五東組　覺傳寺住職　安藤　文秀　九十一歳

二〇一六年四月二十五日

近江第十一組　妙徳寺前々坊守　種村　美尾子　九十六歳

二〇一六年五月三十日

〔敬称略〕

《東本願寺出版刊行物のお知らせ》

『お盆（二〇一六年版）』

盆という大切な仏事をとおして、私たちが忘れかけている「いのち」のつながりや広がりを考えていく小冊子。

著者　安城由紀子
渡邉　晃純
価格　六四円

『僧侶31人のぽけっと法話集』

真宗大谷派の僧侶31人が、日々の生活での出来事をとおして仏教の教えをバラエティ豊かに語る短編法話集。

価格　八一〇円

《夏期事務休暇のお知らせ》

夏期事務休暇として、左記の期間は教務所事務のお取り扱いを休止します。

なお、緊急（期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等は緊急の場合には含みません）の場合以外は、留守番電話にご用件を録音いただきますようお願いいたします。

ご不便ご迷惑をおかけいたしますが、ご容赦くださいますよう、重ねてお願いいたします。

期間　二〇一六年八月十二日（金）から十八日（木）まで

緊急連絡先（教務所携帯電話）

〇九〇－三七一九－七九八二

■京都教区教化テーマ■

今、いのちがあなたを生きている

聞こえますか いのちの声　感じますか いのちのぬくもり

◆教区事業予定

7月　3日（日）	13：00～	児童大会事前会議	会場◇こんぜの里森の未来館
7月１２日（火）	13：30～17：00	出版小委員会	会場◇教区会館３Ｆ　会議室
7月１３日（水）	10：00～17：00	教区会参事会・教区門徒会常任委員会合同会議	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
7月２０日（水）	10：30～17：00	教区門徒会（通常会）	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
7月２１日（木）	10：30～17：00	教区会（通常会）１日目	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
7月２２日（金）	9：30～12：00	教区会（通常会）２日目	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
	13：00～16：30	正副組長会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
7月２５日（月）	10：30～	教師試験検定準備学習会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
～３１日（日）	～15：00	〃	〃
8月　3日（水）	13：30～17：00	出版小委員会	会場◇教区会館３Ｆ　会議室
8月　8日（月）		第５９回児童大会	会場◇こんぜの里森の未来館
～１０日（水）		〃	〃

◆地区・団体事業予定

7月　1日（金）	13：30～16：00	推進員協議会代表者会議	会場◇教区会館３Ｆ　研修室
7月　5日（火）	15：00～17：30	教区保護司会総会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
	18：00～19：00	仏教青年会総会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
7月　6日（水）	15：00～17：30	教区教誨師会総会	会場◇教区会館３Ｆ　研修室
7月　7日（木）	13：30～16：00	教区ハンセン懇総会	会場◇教区会館３Ｆ　研修室
	17：00～19：30	教区児連総会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
7月　8日（金）	13：30～17：00	教区合唱団総会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
7月１２日（火）	9：00～17：00	教区坊守会総会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
	17：00～18：00	大谷スカウト京都支部総会	会場◇教区会館３Ｆ　研修室
7月１４日（木）	10：00～15：00	推進員協議会総会	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂
	15：30～18：00	大谷保育協会京都支部	会場◇教区会館３Ｆ　研修室
8月１９日（金）	13：30～17：00	教区合唱団	会場◇教区会館２Ｆ　大講堂

「教区だより」第333号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

発行日　2016（平成28）年7月1日
発行人　錦　秀見（真宗大谷派京都教務所長）
発行所　真宗大谷派京都教務所
〒 600－8164
京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel：075（351）5260
Fax：075（351）5256
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp
ホームページ：http://www.k-kyoku.net/

印刷所　（有）寶印刷工業所

the editor's note　編集後記

今号「出会いの窓」でご紹介した整理法。私の場合、山積した書類を前に、「ファイルを用意してちゃんと一枚ずつとじていかなければ」と、理想を高くして力んでいた気がします。「整理」に限らず、苦手なことにたいして勝手に理想を高くし、やる気をなくしてしまうことはいろんな場面であるのでは、とふと感じます。たとえばこの文章を書くこと。「うまいこと書かねば」と力むと筆はとまり、「ただ感じていることを書こう」と開きなおると、何とか最後まで今書けました。

（編集委員　岡本大志）